

日本社会福祉学会第61回秋季大会
2013年9月21日(土)@北星学園大学
【若手研究者のためのワークショップ】(大会校プログラム)

「質的調査と量的調査を組み合わせた研究 ワークショップ —トライアンギュレーション手法について—

山崎 喜比古
(現 日本福祉大学社会福祉学部 大学院特任教授)
(元 東京大学大学院医学系研究科
健康社会学/健康教育・社会学教室主任)

今回テーマの画期的意義

- ① 質的調査研究法と量的調査研究法を**相補的に用いて調査研究対象に迫ること**
- ② 量的調査研究法と質的調査研究法の**両方を「若手」時代にある程度勉強し経験しておくこと**

が近年ますます期待され、望ましいとされるようになってきている関係で、大変意義ある画期的な提案と思われた
(企画された岡田先生、北星学園大学の先生方に感謝します)

2名の若手研究者と研究報告の紹介

- ①横山由香里氏(岩手医科大学・助教)
 - 2011年3月、博士(保健学)号を東京大学において取得
 - 博士論文「トウレット症候群を有する若年者のLifeにおける困難とニーズに関する研究—Mixed Methodを用いて—」
 - 《量的調査研究quan+質的調査研究QUAL》タイプの研究
- ②倉持香苗氏(日本福祉大学・助教)
 - 2013年3月、博士(社会福祉学)号を日本福祉大学において取得
 - 博士論文「福祉コミュニティ形成における開発型ソーシャルワークの実践に関する研究—地域拠点としてのコミュニティカフェの分析—」
 - 《量的調査研究QUAN+質的調査研究qual》タイプの研究

今年度【若手研究者のためのワークショップ】の テーマと趣旨

- 若手研究者ワークショップ(以下若手WS)は、学会本部から毎年度依頼される大会校プログラム
- 今年度大会校の北星学園大学の若手WS担当は、大会事務局長でもある岡田直人先生
- 岡田先生が提示されたテーマと提案理由説明は次の通り:
これまで、量的研究と質的研究について別々にWSが企画されてきた。今回は、どちらも聞きたい人、両方を併せた研究法を学びたい人のために、
「質的調査と量的調査を組み合わせた研究ワークショップ—トライアンギュレーション手法について—」
のタイトルで持つことにした、と

今年度ワークショップの持ち方・進め方

- 10:00-10:15 講師によるワークショップの趣旨説明(15分)
山崎喜比古(日本福祉大学・大学院特任教授)
- 10:15-11:05 2人の若手研究者による研究報告(各25分)
 - ①横山由香里氏(岩手医科大学・助教)
 - ②倉持香苗氏(日本福祉大学・助教)
- 11:05-11:15 講師による2者へのコメント(10分)
小澤温氏(筑波大学大学院・教授)
- 11:15-11:20 <質問カードへの記入と回収タイム>
- 11:20-11:45 会場との質疑応答・討論
(当初予定の2倍近い時間を充てました!)
- 11:45-12:00 2人の報告者から今後の抱負、
2人の講師から総括

「トライアンギュレーション手法を用いた研究▲」と 「質的調査と量的調査を組み合わせた研究★」 との関係(▲⇔★)

- ▲Triangulation(トライアンギュレーション、**方法論的複眼**): 創出された分析結果を確かなものにするために、複数の研究技法あるいは複数の調査者、複数のデータ源を使うこと。
ミックス メソッド(下記参照)もその一つ
- ★Mixed method(ミックス メソッド、**質的調査研究法と量的調査研究法の混合/結合**): 質的調査研究(クオリテティブ・リサーチ qualitative research, 以下、**質QUAL/qual**)と量的調査研究(クオンテティブ・リサーチ quantitative research, 以下、**量クオンQUAN/quan**)を順次もしくは並行して行い、それぞれの**方法論の強みと弱みを補完し合い、研究精度を上げていく**方法論的アプローチのこと

量的調査研究QUANと質的調査研究QUALの比較 (1/3)それぞれどういう知見がめざされているか

量QUAN(クオン)：

- ①社会的事象の分布(どの程度の問題がどのような広がりをもって存在しているのか)と②事象間の関連性における規則性・法則性を明らかにすることに大きく貢献
- 演繹的方法(関係仮説など理論仮説のデータによる検証)が主

質QUAL(クオール)：

- ①調査対象の深い理解や②多元的、総合的、全体関連的、類型的な把握、③量的調査では見れなかったり見落とししてきた現象を発見・探索することの必要性に応えるようにして、近年、急速に関心・注目を集めている
- 帰納的方法(質的データから仮説的な概念・理論の構築へ)が主

7

量的調査研究QUANと質的調査研究QUALの比較 (2/3)それぞれのデータの収集・分析技法

量QUAN(クオン)：

- 大数の被調査者に対する調査、自記式質問紙調査
- 統計学的技法

質QUAL(クオール)：

- それに対し、質的調査の技法は、多種多様
- 形式的分類としては、面接法、観察法、フィールドワーク、**事例研究**
- データ収集の技法として、**フォーカスグループ**(インタビュー)、**エスノグラフィー**など
- 質的データの分析技法として、**グラウンデッド・セオリー・アプローチ**、**KJ法**、**分析的帰納法**など

8

量的調査研究QUANと質的調査研究QUALの比較 (3/3)調査・分析結果の一般化可能性や政策への有用性

量QUAN(クオン)に比べて、**質QUAL(クオール)**は、

- 調査者と調査参加者との距離が近い
- 当事者の目線や視点で見たり考えたりすることが保たれやすい

その点で理論や政策へのインパクトはあるが、

- 調査・分析された結果の一般化には限界
- 政策立案・策定への有用性は高くない

(∴①対象が1ないし少数、②把握・理解の方法が主観的・解釈的、であるため)

という限界が否めない

9

量的調査研究QUANと質的調査研究QUALの 組み合わせられ方

- ミックスド メソッドを用いた研究プロジェクト・研究デザインは質QUALと量QUANの(1)どちらが先に行われているか、(2)どちらがメイン(大文字)かによって4つのタイプに分けられる

- 質qual+量QUAN … 山崎HIV(エイズ)ウイルスHIV被害者遺族)
- 質QUAL+量quan … 今回は該当なし
- 量quan+質QUAL … 横山TS(トウレット症候群)
- 量QUAN+質qual … 倉持CC(コミュニティカフェ)

- 枚数に厳しい制限のある投稿論文では、質QUALと量QUANを別々に実施順に投稿・発表、もしくはメインの論文1本に限る場合にも、サブの論文を「対象と方法」の一部、または「研究1・2」のどちらかに書き込んで投稿・発表

10

2001-02年度HIV被害者遺族研究における 質QUALと量QUANそれぞれの調査対象と方法等

■ 質QUAL=面接調査：

- 2001年5月～2002年3月実施
- 36家庭46人の遺族が対象
- 但し、ケースレポート掲載まで承諾したのは32家庭42人の遺族

■ 量QUAN=配票調査：

- 2002年10月～2003年4月末実施
- 遺族家庭392家庭を対象に質問紙を配付
- 有効回答は225家庭307人の遺族から。有効回収率57%(有効回収家庭数/配付家庭数×100)
- 回答遺族の続柄別構成は母親39%、父親30%、妻16%、兄弟姉妹11%、その他4%

11

HIV被害者遺族研究の発表業績等

- 薬害HIV感染被害者(遺族)生活実態調査委員会『薬害HIV感染被害者遺族への面接調査』(2002)
- 同上『2003薬害HIV感染被害者遺族調査の総合報告書—3年にわたる当事者参加型リサーチ』(2003)
- 厚生労働省が2004年に立ち上げた「HIV感染被害者遺族等に対する健康被害等の対応に係る調査研究会」に山崎参加
- Mizota Y, Ozawa M, Yamazaki Y. (2006) Daily difficulty and Desire of the bereaved: A study of bereaved families of HIV-infected Hemophiliacs in Japan. Bulletin of Social Medicine, No.24:43-56.
- Mizota Y, Yamazaki Y, Inoue Y, et al. (2006) Psychosocial problems of bereaved families of HIV-infected hemophiliacs in Japan. Social Science & Medicine. 62: 1403-1413.
- 山崎喜比古・井上洋士編『薬害HIV感染被害者遺族の人生—当事者参加型リサーチから』(東京大学出版会, 2008)

12

HIV被害者遺族研究における4つのリサーチ・クエスションは質QUALと量QUANに通底

- (1) **生前から亡くなるまでの患者被害者とその家族がHIV感染に関連してどのような未曾有の被害と過酷な経験を余儀なくされたのか**
- (2) **このような被害者遺族の死別体験がその後の遺族の健康と生活に及ぼした影響**は、一般の病気による死別の場合とどう違っているのか
- (3) 被害者遺族は、このような未曾有の被害と過酷な経験に、**いかに耐え、いかに対処し、何を支えに生き抜いてきたのだろうか**
- (4) そうした被害者遺族の**望みや願い、そして支援ニーズ**は一体いかなるものなのか

13

質QUAL(面接調査)と量QUAN(質問紙調査)の関係・繋がり(《質qual+量QUAN》タイプの研究)

- 最初に、**事実および問題の探索・発見や事象間の関連性についての仮説の創造**に向くとされる面接調査による質的研究(多数事例研究、マルチプル・ケース・スタディ)を実施
- 次に、**その結果浮かび上がった重要な事実・事象に絞って調査項目や尺度と事象間の関係仮説を設け、各事象の頻度や分布(広がり)を明らかにし、事象間の関連性に関する理論仮説を検証**するために、質問紙調査による量的研究を実施

14

HIV感染患者との死別体験が被害者遺族の心理・生活に及ぼした影響 (その1) 質QUAL=面接調査が明らかにしたもの

HIV被害者遺族は、

- ① 一般の病気による死別を体験した遺族と共通する、**愛する家族の死亡・喪失による深い悲しみ・悲嘆(グリーフ)**に加えて、
- ② 「**殺されたようなもの**だという悔しい思い」に代表される、**きわめて強い無念さと悔しさ**、
- ③ 加害者への抑えられないほどの**怒りや憎しみ**、
- ④ 「**血友病患者として生を授けて申し訳なかったという気持ち**」や「**非加熱濃縮血液製剤やHIV感染の危険にもっと注意を払ってあげていればよかった**という後悔の気持ち」に代表される、**きわめて強い自責と後悔の念**、
- ⑤ 「**亡くなった患者がHIV感染症であったことを周囲に知られないようにしなければならぬ**気苦労やつらさ」に代表される、**差別への日常不断的緊張・不安・警戒**と、一人或いは一家族で問題を抱え込まざるを得ないことによる**過重な心身負担と孤立感**、

に苛まれる生活・人生を余儀なくされてきたという複雑深刻な実相！

15

HIV感染患者との死別体験が被害者遺族の心理・生活に及ぼした影響 (その2) 量QUAN=配票調査が明らかにしたもの

- それらいずれの気持ちも死別直後の1年間はほぼ全遺族が経験、その後の減少傾向は気持ちによって異なり、死別後平均10年後の調査時現在で、**深い悲しみ・悲嘆(グリーフ)**は7割に減っているのに対し、**その他4つの気持ちは依然として9割以上の遺族が抱いていた**
- こうした体験が、調査時現在もなお55%の遺族に見られる**PTSD(心的外傷後ストレス障害)症状**や、45%の遺族における**GHQスコアに見る「精神健康の問題」**発現に有意に関連
- が、「**生き抜く力**」ともいわれる**ストレス対処・健康生成力**が人並み以上にある遺族においても、また、**日々、亡くなった患者を偲び供養**いろいろなことに生きる**楽しみや支え**を見出し、「**薬害HIV関連の活動**」にまで参加している**気丈夫な遺族**においても、**PTSD症状は4割、「精神健康の問題」は3割**に発現

等々

16